

# 「布」展 見どころ解説シート

作成：小野健太（宵衣堂）

## ・用語について

今回の展示でいう「布」とは？ = 植物を原料とした手仕事の布

「自然布」「原始布」(古くは原始織物)「古代布」「草木布」とも  
ニュアンスは若干異なるものの、基本的には同系のものを指す言葉

## ・「布」や衣服の理解のしづらさ

現代社会では無意識のうちに工業製品が基準となり、手仕事の布・衣服の実感を持ちづらい言葉の示す範囲や意味合いの違い、複数の素材・技法が用いられ理解しづらい  
展示資料の理解を深めるために、「素材」と「技法」を分けて考える！

## ●基本的な素材・9種類

アットウシ	素材は”オヒョウ”、ハリ・しなやかさ、アイヌの衣服、刺繍・切伏せ
シナ	硬く・水に強い、縄・日用品などに幅広く多用
大麻布 <sup>たいま</sup>	硬い布だが使い込むと毛羽立ち・柔らかく、温かい”麻”
苧麻布 <sup>ちよま</sup>	カラムシ、ハリ・涼感、夏の衣（イラクサ・アカソもこの系統、野生種）
木綿	和綿、柔らかさ・暖かさ、日本人の生活を変えた布、商品作物的
葛布	軽さ・ハリ・光沢、交織（木綿×葛糸）
藤布	硬い布だが使い込むと毛羽立ち・柔らかく、山の働き衣
太布 <sup>たふ</sup>	楮 <sup>こうぞ</sup> （かつては穀 <sup>かじ</sup> も）、硬い布だが使い込むと柔らかく、山の働き衣
芭蕉布	ハリ・涼感、琉球の基本的な衣料、緋も

## ・糸づくり

「績<sup>う</sup>む」=繊維をつなぎ、糸にする

—上記の「布」では主流派

「紡<sup>つむ</sup>ぐ」=綿状の繊維に撚りをかけ、糸にする

—木綿・ウールなど

（ただし、撚り掛け工程のみを指す場合もあり「績んだ繊維を”紡ぐ”」）

「紡績<sup>ぼうせき</sup>」=機械を用いた工業的な糸作り

## ●技法

### ・こぎん、菱刺の地域性

こぎん 津軽地方 濃紺地に白綿糸、着物

菱刺 南部地方 浅葱地に紺・黒綿糸、股引・前垂

麻布は自給、紺屋で藍染後に刺子を施す

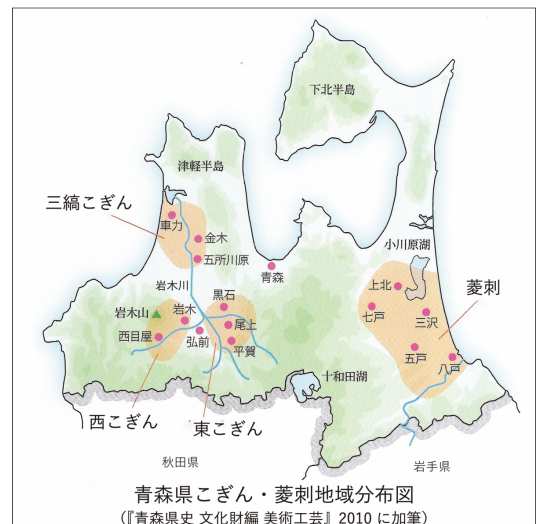
刺す衣服に地域性あり、こぎん・上衣、菱刺・下衣中心

### ・こぎんの柄による産地の見分け

東こぎん 同柄の連続模様（筋なし）

西こぎん 肩に細い筋の連続、胸元に筋が二本

三縞こぎん 太めの筋三本



・刺子、<sup>ぼろ</sup>襤褸、裂織

刺子：予防的 補強・保温のため、布段階で刺し縫いをしたもの 一糸  
 ⇨アイヌの刺繍・切伏せ、あくまで装飾を目的としたもの

襤褸：補修的 傷んだ衣服に継ぎ当てをしたもの、繕い 一小布

裂織：再生衣料 古木綿を裂き、緯糸にして織り上げたもの 一裂き布

原材料として京都など上方の古手木綿（古着）、北前船の海運により東北へ木綿が栽培しにくい東北地方で多用な木綿衣が作られた要因  
 自給目的だけでなく地域産品としての生産・流通

・「<sup>こうしょく</sup>交織」-経糸・緯糸に異なる素材を用いて織ること-

葛布 経糸：木綿 × 緯糸：葛糸 軽く目の詰んだ織物、雨風を防ぐ⇒ 外套などに  
 裂織 経糸：大麻 × 緯糸：裂いた木綿 地厚で目の詰んだ織物、強度・保温性⇒ 働きの目的・用途に応じた素材の選定・組合せ、織物の効果を計算して作られた布

・ぜんまい織

木綿に”ぜんまい綿”を混ぜた糸で織られた布、ゼンマイの油分により撥水性  
 真綿に混ぜた”ぜんまい紬”、白鳥の羽（羽根）を織り込んだ”ぜんまい白鳥織”も戦前は男性物の高級コート地として珍重される

・<sup>おくず</sup>苧屑（オクソ、オアカとも） 一搔卷・大麻布綿入

大麻繊維を取り出す際に出る”繊維くず”、一種の「<sup>わた</sup>廃物利用」  
 東北地方では木綿綿の代用として使用、重く・硬い  
 布より中綿として使う方が多くの素材が必要、貴重な木綿は中綿として使えない

・藤布（紙布）長着

経糸：藤 × 緯糸：藤に和紙を巻く “藤布でも紙布でもある布”、解釈の違い  
 「構造材である藤に、加工として和紙を巻いた」とすると理解しやすい  
 藤は硬い繊維、肌への当たりを和らげる工夫としての紙の使用  
 非常に目の詰んだ織物、「<sup>いぼら</sup>藤は茨を通さない」という伝承

・<sup>かみこ</sup>太布、<sup>しふ</sup>紙衣・紙布・汗はじき -”和紙に連なる布”-

太布 楮を原料とした白い布  
 紙衣 ”揉み紙”=不織布、暖かく柔らかい、型染も  
 紙布 <sup>こより</sup>紙縒の布、交織（経糸：木綿 × 緯糸：紙縒）  
 汗はじき 紙縒の編物  
 東北の古老「体に汗をかくのを怖れる」  
 厳冬期の寒さ、汗により体温を奪われ死に至ることも  
 （現代で言うところの「低体温症」）  
 素肌に汗を残さない工夫・知恵  
 汗対策は生死に直結する切実な問題

